

【主題】 宮城に生きる生徒の主体的・協働的な学びの在り方を探る

【副題】 総合的な学習の時間における「語り部プロジェクト」の実践を通して

【学校・団体名】 宮城県仙台市立南光台中学校

【役職名・氏名】 教諭 大江 明 行

1 研究の動機

2020年3月、新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、全国一斉の臨時休校が発令された。本研究の該当生徒は、小学校を卒業する間近に休校となり、それまで当たり前だった時間、空間、仲間を奪われ、その後も、誰も経験したことのない生活様式の中で、中学校生活をスタートさせた。

平成28年答申において、「2030年の社会と未来について」の言及がなされ、それに伴い学習指導要領に追記された前文には、「多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え」とある。しかしコロナ禍では、他者との協働が非常に困難な状況となり、これまで当たり前のようにあった行事や学級活動、総合的な学習の時間の活動が制限されることになる。その結果として、他者と協働して課題を解決していく力や、自分の考えを主張する力が低下していくことが想定された。

そこで、「各学校においては、(中略)児童(生徒)の心身の発達の段階や特性(等、課題や学科の特色)及び学校や地域の実態を十分考慮して、適切な教育課程を編成する」という学習指導要領の基準に則り、他者と協働しながら、自らの考えを主張する力を育むための新しい方策を思索した。同時期に教育環境として配備されたICT教材を効果的に使い、どのような状況下であっても、充実した学習効果を達成できる、「新たな実践」を考えた。

本稿では、2020年6月に入学した、本校45期生を対象に実施した「総合的な学習の時間(実施期間2020年6月～2023年3月)」において、その実践の過程と効果について述べる。

2 総合的な学習の時間の「題材」と「テーマ」

(1) 題材をどうするか

2021年度は、東日本大震災が発生してから10年目の年であり、テレビや新聞などのメディアでは前年度から、東日本大震災について連日のように取り上げていた。改めて考えていくと、我々大人にとっては自分の人生観を大きく変えてしまった東日本大震災ではあったが、その大人たちの記憶も風化しかかっているこ

と、また、該当学年の生徒は当時3歳であり、記憶が少ないこと、そして被災地であるがゆえに、誰もが心に何らかの傷を負っているという配慮から、極力その内容について避けてきたことで、他県の子どもたち以上に、震災についての知識が少ないこと等が、教育現場で子どもたちと向き合っている中で、実感としてあった。そこで、東北・宮城に生まれ育つ人間として、震災学習にフォーカスを当て、「命」の尊さを認識し、「当たり前」に感謝する心を持つことは、生徒たちがこれからの予測困難な時代を、逞しく、幸せに生きるための大きな原動力となると考えた。

(2) テーマをどうするか

総合的な学習の時間(以下、「総合学習」と略す)の学習内容は、教職員側の力量や情熱によるところが大きく、そのため、学校内の体制を問われることが屢々あった。本校も例に漏れず、「防災」「進路」「旅行的行事」を総合学習の柱に置いてきたが、これらはそれぞれが独立した取組であり、3年間を貫く大テーマが設定されていなかった。そこで教師側のねらいを改めて明確にし、「防災」と「旅行的行事」をリンクさせながら、生徒たちの心に響く、新たな形を模索していくこととし、継続的・段階的に3年間の学習を進めていくことを考えた。その際、「いのち」「生きる」「生き方」というキーワードから『10年後の自分に向けて』という大テーマを設定し、さらに、学年ごとの特色を出すことを狙って、本学年では『過去を知り、現在を押さえ、未来を考えていく』というサブテーマを添え、題材の方向性を『震災から学ぶこと、感じること』に定めた。

3 実践内容

総合学習を3年間の見通しを持って進める中で、『自分の目で見て、自分の耳で聞いて、自分の体で感じて』学ぶという、体験学習を重視した。旅行的行事と関連させながら、実践を進めることとした。

新学習指導要領の総合的な学習の時間の改訂における趣旨として、「日常生活や社会に目を向け、①課題を設定し②情報を収集③整理・分析④まとめ・表現」す

る学習活動の充実を図るとして、その中でも特に「③整理・分析」と「④まとめ・表現」する活動が課題として挙げられている。

改訂の趣旨と本校生徒の実態を踏まえた際、3年間の震災学習の大きな目標として、「修学旅行において関東方面へ行き、他県の中学生に「語り部」として震災学習のプレゼンテーションを行う」（以下、『語り部プロジェクト』と表記）という学習活動を企画し、生徒たちにはこの実践から、自分のコミュニティ以外の人々と交流しながら、自分の考えを主張する力を身に付けさせたいと考えた。主体的・協働的な学びを深める中で、社会における「10年後の自分」の在り方について視野を広げてほしいと願いつつ、この『語り部プロジェクト』を、総合学習における特色ある取組として位置づけ、大きな教育的価値を見出した。

(1) 1学年における実践の概要

日程	具体的な活動内容	
10月30日 5・6時間目	学年集会 「東日本大震災を知る①」	・東日本大震災の映像を見る。 ・先生方の体験談を聞く
12月14日 5・6時間目	学年集会 「東日本大震災を知る②」	・先生方の体験談を聞く ・震災から復興した宮城の映像を見る
1月18日 5・6時間目	講話集会	元・石巻市立雄勝中学校校長・佐藤淳一先生を招き、講話を聞く
2月12日 5時間目	・新聞コラム・資料の活用 ・自分の身近な人の震災体験談を共有	・新聞コラムや震災関連の資料の読み込みと情報収集を行う ・シートに記入した身近な人の体験談を共有する
2月12日 6時間目	学年集会 「東日本大震災を知る③」	・「語り部をする中学生」のVTR視聴 ・新聞のコラム活用
3月3日	校外学習 震災遺構の見学と語り部ガイド	・気仙沼市東日本大震災遺構伝承館の見学 ・石巻市立大川小学校と気仙沼向洋高校の見学
3月12日 5・6時間目 と学年末休業中の課題	1年間の震災学習のまとめスライドを作成	・次年度に行う「まとめ発表会」で用いるスライドを各自 Google スライドで作成する

学年集会「東日本大震災を知る」



身近な人の震災体験談の共有



学年の担当職員や、生徒にとっての身近な人の話であったため、一層心に深く入っている様子であった。

・校外学習の感想(Google スライドのまとめから抜粋)

大川川の皆さんはどんな気持ちだったんだろうと考えるとすごくつらいです。語り部さんの話を聞いて、命の大切さや、1人の命の重みがよく分かりました。大地震に備えて、今のうちから家族と話し合っ
て、命の守り方を知っておくことが大切なんだなと思いました。そして私達がこれからの世代に伝えていくことが大事だと思いました。そして1人でも多くの命を救っていきたいです。(女子A)

語り部さんの話で一番印象に残ったのは冷凍工場から流されてきた魚を入れる断熱材の話です。数千トンの断熱材が校舎にぶつかり、壁が崩れているのを実際に見て、恐くなりました。僕の記憶から消えることなく、ずっと残り続けると思います。(男子A)

(2) 2学年における実践の概要

・2年生では当初、被災県である福島県で9月の野外活動を実施しようと考えていた。しかし、野外活動直前に新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言が再発出され、福島県での活動は断念することとなり、並行して計画していた、次年度の関東方面・修学旅行における「語り部プロジェクト」に注力していくこととなった。

日程	具体的な活動内容	
5月16日 5・6時間目	まとめ発表会 (各学級にて)	1年次の震災学習をまとめたものを、発表する
2月21日 5時間目	学年集会 「語り部プロジェクトについて」	埼玉県の中学生を対象に語り部活動を実施する際の活動計画を周知
2月21日 6時間目	・プロジェクトのグループ編成 ・発表方法のフレームの伝達	「語り部プロジェクト」のグループの確認と、発表の仕方について、大まかなフレームを伝達
3月3日	校外学習 震災遺構の見学と語り部ガイド	・山元町震災遺構・中浜小学校の見学 ・山元町防災拠点山下地域交流センターの見学
3月22日 3・4時間目	スライドの作成・発表準備	「語り部プロジェクト」に向けて2年間の学習内容を整理し、まとめる
3月23日 1~4時間目	スライドの作成・発表準備	「語り部プロジェクト」に向けて2年間の学習内容を整理し、まとめる
春季休業 (予備登校3日間)	スライドの作成・発表準備	「語り部プロジェクト」に向けて2年間の学習内容を整理し、まとめる

・下記に掲載した「まとめ発表会の感想 (Google forms の回答)」から、主体的に学ぶ中で、自分の考えを持ち、他者に伝える力が育まれていることが分かる。

・質問の後に自分が思っていることをそれぞれ発言していて、とてもいいなと思いました。(女子B)

・みんな同じ場所に行っているけど、印象に残ったことや感じ方に違いがあるなと思った。スライドは見やすく工夫されていた (男子B)

・1年次と2年次の校外学習を、テレビ局が継続的に取材していた。修学旅行前に後輩たちに行った「語り部発表会」の様子も夕方のニュースで放送され、これまでの学習と「語り部プロジェクト」について紹介されたことは、生徒の意識を一層高めることとなった。

・「語り部プロジェクト」のグループ編成と発表の仕

方の大まかなフレームについて、2月21日(月)の学年集会にて、下記の通り伝達した。

語り部プロジェクト In 埼玉県・川口市

1. グループ編成

・1学級4グループ × 4クラス = 16グループ
(45期の学年は1学級28人の4クラスであったため、1グループ7人前後の編成となる)

2. 発表時間「30分」

・発表時間を短く設定し、発表者をローテーションすることも考えたが、グループの入れ替えを行うことで、心に浸透する内容が浅くなってしまふことが懸念されたため、グループの入れ替えはせず、30分のプレゼンテーションとする。

3. まとめ発表のフレームの例示

①イントロダクション

・ラポール形成と参加者意識を向上する工夫

②ボディ

- ・テーマ
- ・2011年3月11日の出来事
- ・被災者が歩んできた道程と現在
- ・自分たちが感じたこと、考えたこと
- ・未来について

③クロージング

- ・最も伝えたいメッセージ
- ・質疑応答

・1グループ6~7人として、皆が積極的かつ協働的な議論の中で、様々な観点から考えを比較し、方向性を探究する対話を行いながら、発表準備を進めていた。そして限られた学習時間の中で、イントロダクションの仕掛けを考えたり、3年間継続して学び収集してきた情報を、テーマと照らし合わせて整理・分析する上で、効率よく作業分担をしていた。

(3) 3学年における実践の概要

日程	具体的な活動内容	
4月26日 5・6時間目	「語り部発表会」	本校2年生を対象に各教室で発表会を行う
5月6日 5・6時間目	リモートによる「語り部発表会」	埼玉県川口市立上青木中学校とGoogle-meetを利用して交流活動を行う
5月17日	修学旅行 「語り部プロジェクト」	埼玉県川口市立岸川中学校と仲町中学校にて、3年間の震災学習の発表会を行う
3月10日	学年集会 総合学習のまとめ	3年間の総合学習をスライドや講話等で振り返る

「語り部プロジェクト」仲町中

「語り部プロジェクト」岸川中



・令和4年5月16日(月)~18日(水)の修学旅行の日程の内、17日(火)の午前中に、埼玉県川口市教育委員会の協力のもと、「語り部プロジェクト」を実施した。交流事業の対象校は川口市立仲町中学校と川口市立岸川中学校の2校であり、語り部班全16グループを、8グループずつに分けて向かった。

・現地でプロジェクトを実施する直前の4月26日(火)5・6時間目に、本校2年生を対象として、準備した内容で「語り部発表会」を行った。2年生は総合学習における震災学習のテーマを『復興から学ぶ人間の力』に設定していた。聴衆の反応や、記入させた感想をもとに、3年生は発表内容の修正・改善を図った。

・5月6日(金)、本校と川口市立上青木中学校をGoogle-meet でつなぎ、先方の2年生6クラスと特別支援学級を対象に、リモートによる「語り部発表会」を行った。修学旅行における「語り部プロジェクト」の交流事業を知った上青木中学校の先生から、「リモートで震災学習の交流活動をさせてもらえないか」と要望を頂いたことで、実施する運びとなった。上青木中学校の聴衆を8会場に分け、本校も代表の8グループを決めて、担当教室ごとに分かれリモート発表会を実施した。発表会を行う前に、先方の該当学年では「東日本大震災から学ぶ」と題して、上青木中学校の先生主導のもと、事前学習を実施した(総合学習2時間)。

・5月17日(火)、川口市立仲町中学校と、川口市立岸川中学校において、交流事業「語り部プロジェクト」を実施した。プロジェクトを実施するに当たって、両校には事前に、「東日本震災について知る」「自分事として考え、防災意識を高める」というテーマのもと、合計2時間の総合学習を行ってもらっていた。

体育館で開会行事を行った後、会場ごとに別れて発表会を行った。仲町中学校は全校生徒(5学級)を8グループに分けて、旧2年1・2組の8グループが担当した。岸川中学校は2学年の全生徒(4学級)を8グループに分けて、旧2年3・4組の8グループが担当した。

発表会を無事に終え、岸川中学校の先生から「学び合いの域を超えて、感動と、生きる原動力そのものをもらいました。」という言葉を受けた。岸川中学校の皆さんから温かく見送られるバスの中で、安心感と達成感から、涙を流す生徒もいた。

・下記の仲町中学校の生徒の学習シート(一部抜粋)から、自分のコミュニティ以外の人々と交流する中で、自己の生き方や防災への意識が高まったことが分かる。

くはわりあげておきました。自分事としての当たり前は、未だ
当たり前ではないことに気付かされた。毎日常い生活が定まる
こと、生きていること、日々感謝して生活していきたいなと思いました。
初めは、東日本大震災と聞いて少し被害の大きさから地震とし
か考えいなかたけれど、当時の映像を見て想像よりも恐ろしい
現実がすぐ、声に出せませんでした。Aグループでお話してくださ

りかたです。テレビに映った画像や話し方なくすく
わかりやすいか。たてもノイズも楽しかったし。勉強も
もなしたのてとても面白かった。たても最初、災害が起
きたら近所の大人の指示に従うと思っていきたい。自分
もこれからどうすれば良いのかを今日学んだことを
生かして考えて行動していきたいようにしています。

・3月10日(金)、「故郷復興プロジェクト・震災学習
のまとめ集会」を学年で行った。仙台市教育委員会が
「復興へ！学校の力結集！」をスローガンに、2011年
度より実施してきた故郷復興プロジェクトの取組と合
わせて、45期生がこれまで蓄積してきた学びについて、
スライドや写真、交流した学校から届いた感想や動画
を見ながら、振り返った。

「生きていけば、大切な人に会えます。これ以上の
幸せはないと思います。卒業しても、この先ずっと、
みんなと会えることを楽しみに、私はがんばります。」
という代表生徒の最後の言葉が印象深い。「10年後の
自分」「震災を知る」「繋ぐ」「生きる」という、これま
での学習のテーマを最後に学年全員で確認し、互いの
命と縁に感謝を深めて、3月12日の卒業式を迎えた。

4 成果

・下記に掲載した「語り部プロジェクトを終えての
感想(Google formsの回答)」から、他者と協働して課
題を解決していく力や、自分の考えを主張して合意形
成を図っていく力の高まりを感じた。

岸川中での最初の集会で、宮城と埼玉の震災の違いに驚いて、さら
に緊張しました。しかし、3年間の学習を振り返り、今まで春休みも
みんな集まったり、家で発表の練習をしたり、沢山悩んで迷って、
ここまでの道のりは大変だったけど、この仲間と頑張ってきた良か
ったなと思いました。震災について深く学んだ身として、使命を果たす
ことが出来ました。(男子C)

今まで関わったことのない埼玉の中学生と交流できただけでも、良
い経験になったと思います。その上で、中1から学習を深め、感じた
こと、伝えたいと思ったことを、自分たちの言葉でまとめ、自分たち
と同じ中学生に直接伝えるという、滅多にない貴重な経験でした。埼
玉の中学生に発表したとき、自分たちの思いがしっかり伝わって届く
のか不安だったけど、目を見て真剣に聞いてくれて、ほっとしました。
話す側の立場になって、聞く姿勢で本当に相手の気持ちが伝わって
くるものなのだと実感しました。(女子C)

・題材が「震災」「命」であったこと、また、情報の
収集、整理・分析、まとめ・表現という総合学習の一
連のプロセスを3年間にわたって更新し続けたことで、
自己の生き方を考えつつ、主体的で深い学びを得るこ
とができたことを、上記の男子Cの感想から見取る。

・上記の女子Cの感想から、自分のコミュニティ以

外の人と交流する際に、自分の考えを主張することの
重要性を認識しつつ、対話を通して他者を認めること
で、協働的でより充実した学びが得られるということ
を体得したことが分かる。

・本校生徒の「語り部プロジェクト」の発表を聞き、
涙を流す生徒や先生がいてくれた。生徒たちの多くが
テーマに掲げていた「忘れない」「つなぐ」というテー
マが、実現していることを感じた。

・仲町中学校の3年生は、交流したその年の11月に、
校内合唱コンクールの学年合唱で、東日本大震災を背
景につくられた「群青」という曲を歌ってくれた。示
し合わせたわけでもなく、本校の該当学年の3年3組
も、7月の校内合唱コンクールでこの曲を歌っていた。
仲町中学校の代表生徒は合唱前のスピーチで、語り部
プロジェクトのことを振り返り、「今、目の前にある当
たり前に感謝し、仲間、先生、家族、一人一人の命を
大切にしていこう」と語ってくれていた。この時のス
ピーチと合唱の動画は、最後の「総合学習のまとめ」
の学年集会で紹介し、繋がりを全員で共有した。

・仲町中学校は、翌年の総合学習のテーマを「防災」
に設定し、地域の防災マップ作成を行った。交流学習
で学びを共有したことが、その学校と地域にまで影響
を与える実践として広がりを見せた。

・先日、卒業した45期生が来校した際に、「高校で
グループ活動とかプレゼンをするとき、いつも語り部
プロジェクトのことを思い出します。あの時は不安
だったけど、一生忘れられない時間になるんじゃない
かってワクワクもしていた。本当に一生忘れられない
財産になりました。ありがとうございました。」と述べ
ていた。このことから、本稿の実践が、主体的・協働
的な学びを支える根拠となったことを確信した。

5 今後の展開

今回の実践を通して、主体的・協働的な学びの中で、
自分の考えを伝える力が付いたことは確かである。一
方で、本来のコミュニケーションは共感を伴うもので
あり、他者を理解する力にも注力していく視点を持つ
ことが必要である。東日本大震災に限らず、日本や世
界各地で起きる災害に対して、身近な災害と同じだけ
の理解や共感を示せる力を身に付けさせたい。この点
に留意し、次年度の48期生の修学旅行では阪神・淡路
方面へ行き、神戸市消防局の方や、全国に先駆けて防
災科を設立した高校の学生との新たな交流学習を実践
すべく、現在計画当中である。